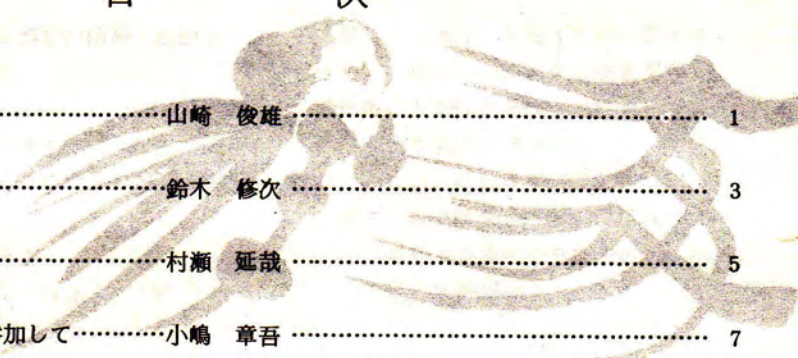


目次



比較技術考古学.....	山崎 俊雄	1
私の研究.....	鈴木 修次	3
私の研究.....	村瀬 延哉	5
全国学生学術文化集會に参加して.....	小嶋 章吾	7
広島ごみ問題に見られる行政の犯罪性.....	黒岩 祐治	8
総合科学部の印象.....	森本 邦彦	13
理論と実験.....	小島 健一	14
一有機化学徒として.....	深宮 斉彦	15
学生相談室懇談会報告「総合科学部と総合科学部生の将来」.....		16

比較技術考古学

山崎俊雄

1 その国際的背景

私は昨1976年4月、東京工業大学工学部から広島大学総合科学部へ転任してきた新入生である。工学部では国立大学最初の技術史という科目を担当し、ここでは大学院まで技術史を専攻できる最初の講座を分担することとなった。たいへん光栄であり重責を感じている。

さて技術史でいま国際的に注目されている分野は産業考古学 Industrial Archaeologyという新興の学問である。この名称は1950年代末イギリスで唱えられ、イギリス経済史専攻の小松芳喬教授によって産業考古学という訳語がつけられた。はじめは産業革命期の遺跡、遺物を発見、保存、復元し、これによって技術と産業を実証的に研究しようという提唱であった。

この提唱はその後予期しない反響をよび、地方史研究者を結集する一種の国民運動に発展した。この研究に熱中するアマチュア歴史家、技術者、エコノミストが続出し、イギリス全土にいまや100に近い研究サークル、学会が誕生し、300に近い産業関係の博物館が出現している。そのもっともみごとな例がセヴァーン川の渓谷に建てられたアイアン・ブリッジ野外博物館である。

アイアン・ブリッジというのは今からはほぼ200年前、この川に架けられた世界最初の鑄鉄橋である。その付近でダービー家がコークス製鉄に成功し、その遺跡も復元された。その他、蒸気機関、排水ポンプ、窯炉、倉庫、運河インクライン等も保存、復元され、広大な森林地帯に一大技術史博物館群が出現し、多くの産業革命研究者を集めている。

この博物館が完成した1973年に第1回技術記念物保存国際会議が開かれた。ついで第2回目が1975年に西独ボッフムの炭鉱博物館で開かれた。ここに日本代表として私も招かれ、日本の現状を報告した。

ドイツもまた産業考古学の研究と事業が盛んである。日本と同じように1960年代の技術革新は過去の遺物・遺跡を消滅させ、ドイツ人の誇りをいちじるしく傷つけている。そこで西ドイツは物質文化財、

精神文化財を総合的に復元、保存する町ぐるみ村ぐるみの運動を起していることは日本にもよく紹介されている。

この運動の物質文化的側面がボッフム Bochum 炭鉱博物館によって分担され、ルール地方の技術記念物の保存に指導的役割を演じている。ボッフムという人口約40万の小都市は世界最大といわれるルール大学の新設で有名であるが、技術記念物保存運動の中心であることは日本ではまだあまり知られていない。この博物館が作成した最新の調査によれば、西ドイツで現在保存の対象となっている技術の遺跡は約350カ所に及ぶ。

東ドイツの方もまた盛んである。研究の中心はフライベルク鉱山大学であり、リーダーは同大学生産力史担当のヴェヒトラー教授である。同教授の好意でチェッコとの国境に近いエルツ山脈の鉱山博物館を巡視したが、社会主義政権の下では人間労働の手段であり所産である技術を永久に保存することを当然の任務とし、老若男女のすべての国民がこれらの博物館見学に喜びと希望を見いだしている姿に強い印象を受けた。

次期国際会議の候補となったスウェーデンも熱心である。ここは両大戦の中立国であり、戦災を受けていないだけに復元の必要がない。この国と反対なのは産業の3分の2も破壊されたポーランドである。この国では物質文化史研究所が中心となって、保存の対象1500リストを作成し、いまや着々と保存、復元の準備を進めている。

ポーランドや両ドイツの例は、戦災、天災など災害に保存不可能の責任を転嫁することができないことを示している。徹底した廃墟のなかでも元通り復元してみせるといふ、ヨーロッパ人不屈の魂をここに発見し、私は大いに自信をとり戻した。運動と研究、実践と理論の統一が要求されるゆえんもここにある。

2 国内の研究と広島

私が技術記念物の発見と保存に関心をもつように

なったのは、1969年博物館明治村の機械館建設を担当したところである。この館は元東京工大教授谷口吉郎館長の方針により、日本最初の工作機・作業機・原動機の総合的コレクションであるのみならず、実際に作動して見せるという動態展示方式をはじめ採用した。たった1年の準備期間であったが、全国の主な鉱山、工場、学校をまわって明治期の現存機械を調査することができた。

この調査で判明したことは、高度成長の構造改善事業が歴史的に貴重な機械をスクラップ化させていることである。ある毛織工場では、スクラップ寸前のミュール精紡機を通産省に交渉して命を救ってもらったことがある。国鉄は全国工場の明治期工作機のリストを作成してくれ、その一部を保存しているが、その経歴の不明なものも多く、今なお研究課題のひとつとなっている。

この機械館が完成したあと、国内では多くの記念物が各地で政府の援助もなく自主的に保存されるようになった。例えば鉱山では佐渡、生野、神岡、別子が大資本により、石炭では宇部と直方が地元の協力により、鉄道は国鉄、通信は電々公社により、それぞれ明治百年のスローガンを適当に利用しながら進行している。その規模はとにかくとして、数だけは欧米にけっして遜色がない。

国内の産業考古学に対する関心も欧米と同様に深まり、昨年9月から日本にも「産業考古学会」を結成しようという動向がある。初回は私が報告し、11月第2回は和紙と鉄道記念物の報告があった。次は2月11日に創立総会を開く。2月11日は私の提案になり、建国記念日だからというだけでなく、エジソンの誕生日だから現代文明につながるというこじつけである。会の実務はもと私たちの研究室にいた雀部技官が国立科学博物館工学研究課で世話してくれるので、照会すれば誰でも入会できる。

中国地方で将来、産業考古学の研究を盛んにするには広島大学がそのセンターとなるほかない。すでに文学部考古学教室に事務局をおく「たたら研究会」は全国の研究者を結集している。イギリス産業考古学の研究センターは新設のバス大学である。

そこで広島地方に現在どんな技術記念物が保存されているかを調査することも当面の課題である。原爆ドーム、平和記念資料館はいうまでもなく国際的に貴重な一種の技術記念物でもある。江田島の元海軍兵学校教育参考館わきに保存される太平洋戦争開

戦と敗戦時の2隻の特殊潜航艇は日本海軍技術の性格をまことに象徴する記念物である。

市内の国鉄の工場、学園にはそれぞれ蒸気機関車が準鉄道記念物として最近保存された。宇品港は千田懸合によって計画、建設され、銅像が残っているが、港湾博物館があってもよい。太田川河口デルタをめぐる広島市干拓地開発の総合博物館も夢ではないであろう。

そのほか、世界有数の縫針の産地である広島市内に縫針の博物館、灘の酒に対抗して軟水で良質の酒を醸造した広島酒の博物館など、夢想するだけでも楽しい。ことに広島酒は東京工大の前身校、東京高工化学科の先輩が開発したことを知って、近く研究してみようと考えている。広水力発電所の役割は近代技術史を学ぶ上に欠くことのできない存在である。

これらの例は広島市民1年生たる私の生半可な知識でしかない。広島地方史研究に生涯をかけた多くの先生方の御指導を仰がねばならない。これらの地方の研究成果が全国的に集積されるとき、日本の産業考古学は幼年期を脱して本格化するであろう。

永久に保存される技術記念物の教育的意義は絶大なものであることは欧米の博物館が示している。技術史に関する未来の教育は、学校教育、社会教育とも、博物館を通じて行なわれる。技術者はふつう論文を残さず、その業績は機械、装置、施設など有形の具体的な実物でのこるのが一般である。したがって技術史の研究はこれらの実物が無ければ実証的には不可能である。

戦後の技術革新は科学技術革命という世界史的なテンポで進行し、物によっては2、3年で陳腐化して博物館行となる。最新のオートメ工場でもそうであり、現存物も明日は遺物となる運命にある。と同時に技術移転(テクノロジー・トランスファ)もますます国際化する動向にある。

そこで最後に、産業考古学にかわって私の発明した総合科学の新領域を提唱したい。それは標題にかかげた比較技術考古学である。考古学という手法は先史時代のみならず現代に及んでよいことはすでに今日の常識となった。

産業考古学というのはイギリス人の発明になる概念である。イギリス以外のヨーロッパ諸国ではこの概念にひどく抵抗を訴えている。東欧ではとくにそうである。